ヘッセのアジア
―紀行文集『インドから』(1913)―

重竹　芳江

佐賀大学全学教育機構紀要　第11号
Journal of Organization for General Education
Saga University
Volume 11, 2023

ヘッセのアジア
―紀行文集『インドから』(1913)―

重竹　芳江[1]

― Reiseberichte“Aus Indien” (1913) von Hermann Hesse ―

Yoshie SHIGETAKE[1]

要　旨

ヘッセは生涯アジアに言及し、アジアを語り続けたが、その根底にあるのはヨーロッパ人としての人間のあり方である。特に1911年のアジア旅行では自らがヨーロッパ人であることをとりわけ強く感じることとなった。自分自身の内面との絶えざる葛藤とは、心理学的な意味での意識の世界と無意識の世界との拮抗である。それはヘッセ文学においてヨーロッパとアジアの対比でイメージされてきたものではあるが、そこで描かれるアジアは往々にしてステレオタイプなものであったり、極端に理想化されたものであった。本論では従来重要視されてこなかったヘッセのアジア旅行の意義を再認識するために、旅の成果である紀行文集を詳細に分析する。

20世紀初頭、ドイツでは商業旅行とは別枠で作家による非ヨーロッパ圏への旅が流行した。この時代には紀行文に対する需要が大きく、それに応えて出版社でも競って作家たちに旅行記を書かせていた。ヘッセのアジア旅行もこのような状況を背景に実現したものではあるが、ヘッセは実際に現実のアジア旅行を通して、自分が心に抱いていた憧れがヨーロッパ人の視点で理想化したアジアであったことに気付き、五感を通してアジアのもつエネルギーに感嘆し、その後堕落したアジアに対する失望を感じている。そしてそこから自分が探し求めていたアジアは現実のアジアではない何ものかであることを予感するに至るのである。

【キーワード】ヘルマン・ヘッセ　ヨーロッパ　アジア　無意識　紀行文

1　アジア旅行

1-1　アジア思想の影響

アメリカと日本で爆発的なヘッセブームが巻き起こって以来、ヘッセとアジアとの関係はドイツ国内だけでなく、外国の研究者によっても繰り返し議論されるテーマとなった。多くの場合、「アジア」や「東洋」という包括的な概念が用いられるが、ヘッセにとってのアジ

[1] 全学教育機構

アはほぼインド、中国の古典世界に限定されている。

事実ヘッセは幼少時からいわゆるアジア的な雰囲気の中で成長した。ヘッセとアジアとの関係を語るとき必ず言及されるのは、祖父母と両親がプロテスタントの伝道師としてインドに赴任していた経験を持つため、当時としては極めて珍しいエキゾチックな空気のなかで育ったということである。一方、アジア思想との関わりは、青年期にショーペンハウアーを通じてインド哲学に熱中することから始まった。中国思想に傾倒するのはこれよりも後のことであるが、リヒャルト・ヴィルヘルム訳の『老子』、『荘子』他、当時手に入る文献にすべて目を通すほど熱心であり、また中国思想に生涯変わらぬ共感を持ち続けた。晩年のヘッセは庭に竹を植え、『ガラス玉演技』の「老兄」のような暮らし方をしていたという。

インド哲学の影響としては、特に輪廻思想との関連が挙げられる。キリスト教世界において異質な謎ともいえる輪廻転生の思想は『シッダールタ』に色濃く現れている。『シッダールタ』はアメリカでと同様ドイツでも反響の大きかった作品で、これによって「アジア的作家」としてのヘッセの位置が確立した。[2]とはいえ、この作品が本当に「アジア的」といえるのかについては疑問が残る。これは仏陀（釈迦）の幼少期の名前「シッダールタ」を用いて彼が悟りに辿り着くまでの苦難の道を描いた作品であるが、その苦難の道は本来の仏陀（釈迦）とはかけ離れており、どちらかといえばキリストの受難に近い。また、シッダールタの目指す「解脱」が、結局のところひたすら「自我」からの脱出を意味していることは見逃すことのできない点である。アジアの衣をまとってはいても、『シッダールタ』の内容は非常にヨーロッパ的なのだ。

中国思想の影響に関しては、ヘッセ自身、インドの哲学の中に何かを探し出そうと試みたこと、そして実際に何かを見つけたのは中国思想においてであることを繰り返し書き記している。ヘッセの愛読書であった『老子』や『荘子』との関連から、主に道教の教えとヘッセの思想との共通点も指摘されている。[3]個々の指摘は妥当であり納得できるが、それにもかかわらず、ヘッセにおけるアジアが中国と中国思想を指すのだという解釈には賛成しがたい。中国の研究者の間にもこのような解釈には違和感や拒否反応があるという。理由の一つは、ヘッセが現実の中国思想に関してあれだけの文献を読みながら、辛亥革命後の中国についてはほぼ何もコメントをしていないことである。ヘッセにとっての中国はあくまでも古典思想の世界にほかならないのである。理由のもう一つは、何が中国的であるかという問題である。ヘッセにおいて中国の影響とみられるものがアジアの研究者とヨーロッパの研究者では大いに異なっているというのはその根拠となるだろう。[4]

確かにヘッセはアジア、特にインド哲学と中国古典から多くのものを吸収している。それに疑いはないが、その際ヘッセが絶えず何かを探し求めて古今東西の書物をひもといている

---

[2] Pfeifer, Martin (Hrsg.): *Hermann Hesses weltweite Wirkung*. Frankfurt a.M. 1977, S.32f.
[3] Liu, Weijian : *Die daoistische Philosophie im Werk von Hesse, Döblin und Brecht*. Bochum 1991, S.42f.
[4] Hsia, Adrian : *Hermann Hesse und China*. Frankfurt a.M. 1974, S.9f.

ことも忘れてはならない。アジアなるものからヘッセが汲み取ったものも、ヘッセが自分の内部にその存在を予感し、求めていたものと考えるべきであり、いわゆるアジア的なものである必然性は全くない。「精神分析が明らかにし、学問的に公式化したものは、詩人たちがいつでも知っていたことなのだ」[5]とヘッセは主張していた。「詩人たちがいつでも知っていたこと」とは、ヘッセが書物を通じてアジアなるものの中に見出そうとし続けたものに等しい。と同時に、実体験としてのアジア体験の中でもヘッセは同様の何かを探し求めている。

ヘッセにおけるアジアの影響を考える際、これまでは書物を通じての哲学的・思想的影響ばかりが注目されていたため、ヘッセが生涯ただ一度身をもって体験したアジア旅行がヘッセ文学全体に対して持つ意義はなおざりにされているようだ。旅の成果である紀行文集『インドから』Aus Indien もヘッセ研究の中ではほとんど扱われることがない。しかしながら、アジア旅行はヘッセにとって内なる無意識の旅であり、後に『デーミアン』以降の文学の源泉となる体験である。以下、アジアへの旅がヘッセにとってどのような意味を持っていたのかを確認するために、紀行文集『インドから』と「旅日記」の分析をし、探究の旅としてのアジア旅行と無意識世界との接点を浮き彫りにする。

1-2　旅の成果としての紀行文集

1911年９月７日、ヘッセは友人であるスイス人の画家、ハンス・シュトゥルツェネガーと二人でアジアへ旅立った。もともとこの旅行はシュトゥルツェネガーが東南アジアで働く兄に会うために計画していた旅に、話を聞いたヘッセが急遽便乗して同行することを決めたものである。この旅で二人はシンガポール、スマトラ、セイロン（現在のスリランカ）をまわった。本来はヘッセの祖父母や両親に縁の深いインド南部のマラバール海岸も訪ねる予定であったが、健康を損ねたことと、考えていたより費用がかかったことが理由で実現しなかった。約３ヶ月の滞在の後、二人は予定を繰り上げて帰国している。

この旅の成果として1913年『インドから』と題された紀行文集がフィッシャー社から刊行された。21編の短い紀行文、11編の詩、小説『ロバート・アギオン』が収められている。インドはヘッセにとって幼い頃から憧れの魔法の国であったが、旅は完全な期待外れに終わった。紀行文集刊行の９年後に書かれた随想「インドからの訪問者」（1922）には、このアジア旅行に関して、実は失望の旅であり、逃避だったと記されている。幼児期に魔法のように感じたインドの香りや、青年時代に精神の支えとなったインドの書物は、ヘッセがインドの精神を理解するのにはまだ十分でなかったという。

> 熟れずに落ちた果実は何の役にも立たない。私は人生の半分以上、インドや中国の研究をしてきた。というか、学者として名声を博するためにではなくて、インドや中国の詩

[5] Hesse, Hermann: *Künstler und Psychoanalyse*. In: GW.10, S.49.

や敬虔さの香りの中で呼吸をする習慣になっていたのである。けれども11年前に私が初めてインドへの旅行をしたとき、私はそこで椰子の木が生え、寺院が建っているのを見て、お香や白檀の匂いを嗅いで、渋みのあるマンゴーや柔らかいバナナを食べはしたけれど、それらすべてのものと私の間にはベールがかかっていた。そしてキャンディの町の只中で仏僧に取り囲まれながら、私は本物のインドへの、本物のインドの精神への、それらとのいきいきとした触れ合いへの、ヨーロッパにいるときと変わらぬ落ち着かない憧れを抱いていたのである。インドの精神はまだ私のものではなかった。私はそれをまだ見つけておらず、探しているところだった。それゆえ私はヨーロッパから逃げたのだ。私の旅は逃避であった。私はヨーロッパから逃げ、その毒々しい趣味の悪さと、騒々しい香具師のような商い、いらいらとした騒々しさ、粗野で馬鹿げた享楽主義のために、ヨーロッパをほとんど憎みさえした。[6]

この翌年、ロマン・ロランに宛てて書いた手紙にも、ヘッセ自身この紀行文集に不満足であったと記されている。つぎに挙げるのは1923年４月６日の手紙の一部である。この時期、二人は『シッダールタ』に関して意見を交わしていた。[7]

……私の本『インドから』に対するあなたのご質問は私をいささか困惑させます。ともあれ、あの本のことをすべてお話しいたしましょう。あの本には挿絵はなく、文章だけです。風変わりな小さい物語を一つ載せています。当時（1911年）私を大いに楽しませ、今でもすばらしいと思っている、イギリスに支配されていたインド世界の物語です。しかし、内容の主な部分、マラッカ、スマトラ、セイロンでの当時の私の旅のメモは残念ながらお勧めする価値がありません。あの本は満足のいかないもので、実のところ旅そのものが失望だったのです。つまりあの時点としてはということですが。というのもその後あの旅は非常にすばらしい果実を結んだのです。けれども当時、ヨーロッパ疲れでインドに逃げ出した時期には、私は彼の地で異国の刺激以外には何も満たしませんでした。旅の間ですら、この物質的な異国は私を惹きつけるよりむしろ私が当時すでに知っていて探究していたインドの精神から私を引き離したのです。

紀行文集『インドから』は、ヨーロッパからの逃避、その対極にあるアジアへの賞賛、そして現実を知ることによる失望という三本の柱から成り立っている。ヘッセはこの旅行を失敗に終わったと感じているが、その一方でこの旅は時を経て立派な実を結んだとも語っている。そして生涯アジアに言及し、アジアを語り続けた。この紀行文集は、現実のアジアを体

---

[6] Hesse, Hermann: *Besuch aus Indien*. In: ders.: *Aus Indien*. Berlin 1919 , S.241.

[7] 『シッダールタ』のフランス語訳は1925年にパリのグラセー社より刊行されているが、翻訳出版に当たってはロマン・ロランの推薦が大きな役割を果たしたという。

験することにより、アジアの何がヘッセの内部に残ったのかを知る上で重要な作品である。ヘッセ自身この旅を通じてようやく、自分がアジアに何を求めているのかをおぼろげながら意識し始めたのである。

1-3　旅行作家としての旅

このアジア旅行を実現するにあたって、ヘッセは出版社フィッシャーから4000マルクの補助金を受けた。この時のやりとりに関しては、ザムエル・フィッシャーの手紙だけが残っている。1911年７月初旬、作品はできないかもしれないが旅行のための補助金を出してもらえるかと問い合わせたヘッセに対し、フィッシャーはつぎのように返答している。「たとえこの旅行から直接作品が出てこないとしても、私は喜んで旅行の補助金4000マルクを御用立てしましょう。けれども旅行に関して何か書いてください。そうすればそれを『ノイエ・ルントシャウ』に掲載することによって差し引きゼロになるでしょう。（……）この4000マルクに義務をお感じになる必要はありません。もし具体的なものが何も出てこなくても、旅の様々な印象があなたのモチーフを豊かにするということで私は満足です。」[8]

取材旅行に対する出版社からの作家への補助金は20世紀初頭にあっては珍しいものではなかった。以下、作家たちが外国に旅するようになった歴史的背景を振り返ってみる。ヨーロッパとアジアの交流には、特に1969年のスエズ運河開通が重要な意味を持つ。それまでヨーロッパからアジアへ向かうには、ヨーロッパの大西洋岸からアフリカ南端の希望岬を回ってインドに達する、バスコ・ダ・ガマの発見した航路を取るしかなかったが、スエズ運河の開通によってその航路は40パーセントも短縮された。ヨーロッパ人のアジアへの進出はこのような空間的・地理的な距離の短縮によって始まった。

1900年頃の世界はヨーロッパと非ヨーロッパとに二分されていた。植民地獲得という新しい波が多くの国を巻き込んでいた時代で、ヨーロッパはその権力拡張のクライマックスにあった。百年足らずの間にヨーロッパは世界の85パーセントをも支配するようになり、その経済的・技術的な発展は止まるところを知らなかった。イギリスは領土の３分の１に当たる広さの新領土を加え、5700万人の人口を新たに支配下に置く。フランスは、1880年にはアルジェリアとベトナムの一部を除けばほとんど植民地を持っていなかったが、1904年になると875平方キロメートルの領土と3700万人の人口を所有するようになった。「遅れてきた国民」であるドイツも19世紀の終わりにわずかなまだ占領されていない「陽の当たる場所」を確保した。ドイツは1884年から1885年にかけて南洋とアフリカを、1897年から1898年にかけて中国を占領した。ドイツは19世紀最後のわずか17年間に、250万平方キロメートルの植民地と200万人の植民地人口を獲得したのである。ヴィルヘルム二世は好景気のおかげも相まって植民地問題で一気に国民の信頼を集めた。ビスマルクによって統一された新しいドイツは、

---

[8] Rodewald, Dierk (Hrsg.): *Samuel Fischer/Hedwig Fischer, Briefwechsel mit Autoren.* Frankfurt a. M. 1989, S.637.

国を挙げて外へと向かい始めたのである。

イギリスの帝国主義とドイツの武力外交は、スペンサーやダーウィンが言う意味での「自然の選択」理論を政治的・帝国主義的に都合よく用立てた。ヨーロッパは全世界の主人公として、カオス状態の遅れた東方を自分たち自身を手本として文明化、キリスト教化するという理想を掲げ、その行為を正当化した。

ヨーロッパの国々がこの時期外へ出ていくようになったのには、まず経済的な理由がある。ヨーロッパで19世紀後半に始まった技術革命は、多種多様の自然資源に対して新しい需要を大量に呼び起こした。現代の産業に必要な自然資源は、コルク、鉄、錫、ニッケル、金、白金、銀、水銀、砒素、石炭、ゴム、石油であるが、これらの資源の多くはヨーロッパでは全く産出しないか、産出されてもごくわずかにすぎない。ヨーロッパはこれらの資源を求めて、アジア、中央アフリカ、マレー半島、太平洋諸島にまで出かけていくようになった。社会的条件や気候などの条件がヨーロッパ人の移住に適当ではないと思われる場所も争奪の的になった。先進国の企業家たちはこの時期、後進国の現地で新しい事業を起こし、現地での経営を始めるようになる。19世紀末に高度に発展したヨーロッパの資本主義はこのような形で非ヨーロッパへと拡張していく。[9]

非ヨーロッパ、とりわけ東洋への関心は、しかしながらこのような政治的・経済的なものに限られなかった。政治的・経済的なヨーロッパの優位が明らかになったまさにこの時期、ヨーロッパのエリートたちはヨーロッパに不安を抱き、東方を向き始める。20世紀初頭、ドイツでは商業旅行とは別枠で作家による世界旅行、特に「東方への旅」が流行した。マックス・ダウテンダイ（Max Dauthendey 1867-1918）、ヘルマン・グラーフ・フォン・カイザーリング（Hermann Graf von Keyserling 1880-1946）、ルードルフ・カスナー（Rudolf Kassner 1873-1959）、ベルンハルト・ケラーマン（Bernhard Kellermann 1879-1951）、アルフォンス・パケー（Alfons Paquet 1881-1944）、ヴァルデマー・ボンゼルス（Waldemar Bonsels 1880-1952）といった作家たちは各々インド、中国、日本を旅行し、紀行文を発表した。地図上から未知の部分が消えていくのと同時に、辺境の地に関する情報が増加する。この時代には紀行文に対する需要が大きく、それに応えて出版社でも競って旅行記を書かせていた。特に植民地に関する情報は好んで読まれたという。読者の大半はエキゾチックな遠い国々に対する幻想と空想とを満足させたいと望んでいた。旅行作家たちは当然ながら人々のそのような欲求を満足させる義務を負っていたのである。[10]ヘッセのアジア旅行もこうした状況の中で実現したものであった。ベトガーはこの時代の旅する作家たちが書いたものを表すのに、「雑文的」feuilletonisch、「旅行雑文」Reisefeuillton といった語を用いているが、実際ヘッセに最初に期待されていたのも純粋な芸術作品というより、もっと軽い、異国の空気を感じさせ

---

[9] Günter. Christiane C: *Aufbruch nach Asien. Kulturelle Fremde in der deutschen Literatur um 1900.* München 1988, S.11f.

[10] Böttger, Fritz: *Hermann Hesse. Leben, Werk, Zeit*. Berlin 1974, S.163f.

ることを目的とした旅行雑文、旅行随想だったと考えられる。

ヘッセのインド旅行の背景に以上のような事情があったとなれば納得できることであるが、この旅行の直接の成果であった紀行文集『インドから』（1913年）は、かなりの部分異国での体験報告としてのステレオタイプな情景描写が含まれている。言い方を変えれば、「東洋はこうあるべきだ」という目でヘッセが見たインドネシア、つまりヨーロッパ人の視点で切り取ったアジアが多く描写されている。初めて訪れる異国、それも祖父母や両親ゆかりの地であり、青年時代にその精神世界に魅せられた国ともなれば、それなりの期待と先入観があって当然だろう。その期待の一部は満たされ、一部は裏切られた。ヘッセが感嘆したのは熱帯密林の濃厚な自然である。人間の手のついていない自然、破壊されてもたちどころに再生する大自然の力が、ヨーロッパでは見ることのできない生命力の塊としていきいきと描き出されている。力強いアジアの自然に対する称賛が増大し続けるのとは対照的に、アジアに対する無条件の感嘆は実際のアジアを体験したことで減少する。ヘッセは生きた人間としての大勢のアジア人、うごめく群衆に圧倒されると同時に、特にヨーロッパ文明に毒されて独自の美を失いつつあるアジアとアジア人に幻滅している。アジアの人々に対するヘッセの反応は、ある時は賞賛に、ある時は嫌悪にと揺れ動くのである。以下、紀行文『インドから』、旅日記[11]、旅行後に新聞や雑誌に発表した随想を軸に、旅程を追いながら、アジアに対するヘッセの憧れと現実、失望、そしてそこから見えてきたアジアの正体を確認していく。

2　憧れ

2-1　詩「アフリカの向かい側で」Gegenüber von Afrika

1911年９月４日、ヘッセはボーデン湖畔の自宅からまず対岸のシャフハウゼン（スイス）に行き、一緒に旅行をするハンス・シュトゥルツェネガーと合流する。９月５日、チューリヒ経由でイタリアのコモまで南下、翌９月６日には自分たちが乗る客船、プリンツ・アイテル・フリートリヒ号を見に港へ出向いた。９月７日、正午に出港。しばし家族のこと、自分の心配事などの思いにふけるが、ほどなく煩わしいことはすべて忘れて船上の生活を楽しみ始める。９月８日、燃料補給のために半日ナポリに停泊。

９月９日午前３時に再び出港、昼頃ストロンボリ島、カラブリア、メッシーナ海峡を通過。シチリア島、エトナ島はかすんでいるが、イタリアの海岸は日光で黄金色に輝いている。大昔に地震で壊されたという町々が見え、イタリア最南端には険しい岩山が連なる。岩山の麓には自然のままの見知らぬ町が半円状に、動物の口に呑み込まれるような形で岩に囲まれている。旅情をそそるこのような光景を目にしながら、詩「アフリカの向かい側で」はこの日、

[11]「旅日記（＝インド旅行のメモ）」*Notizen von der Indienreise* は1980年にフォルカー・ミヒェルスによって新たに編纂された『インドから』の版に加えられたものである。ヘッセ本人の原稿にはタイトルはついていない。2001年より刊行のヘッセ全集 Sämtliche Werke 第11巻には「インドネシア旅行の旅日記」*Tagebuch der Indonesienreise* というタイトルが付されている。

船中で書かれた。おそらくこの紀行文集の中で最初に書かれたものである。[12]

アフリカの向かい側で[13]

故郷があるのというのはいい、
我が家の屋根の下でのまどろみ、
子どもたち、庭、飼い犬、それらは甘い。ああけれど、
先回の旅の後、ほとんど休みもしないうちに
遠くのものが新たな誘惑をたずさえておまえの心から離れない。
郷愁に苦しむ方がずっといい、
高い星空の下で一人
憧れを抱いている方がいい。
所有したり休息したりできるのは、
心臓が穏やかに鼓動する人だけだ。
その一方で漂泊者は苦難と旅の労苦をいつも勘違いした希望の中に背負っている。
（……）
探すこと、決して見出さないことの方が私にはずっとすてきだ、
近いものにぴったりとあたたかく縛られるよりも。
というのも私はこの地上では幸福の中でさえ、
単なる客にすぎず、決して市民にはなれないのだから。

ボーデン湖畔でのようやく安定してきた生活から早くも逃げ出さざるを得なかったヘッセの心境が、「故郷、我が家、子どもたち」といった一つの極と、「新しい誘惑、遠くのもの」、「高い星空の下」といったもう一方の極との対立で表され、その間をさすらう漂泊者としての自分を、遠いアジアの途上にある現在の自分に重ね合わせている。

フーゴー・バルは、ヘッセ自身なぜ自分が旅するのかはっきりしていないようだと評している。[14]確かにこのアジアへの旅は偶然の機会から実現したものであったには違いないが、この詩から読み取る限り、たとえ何を求めているのかが定かでないとしてもヘッセが何かに憧れ、それを追い求めるために旅に出た心境が表れている。旅の目的は、何か分からない何かを探すことなのだ。

---

[12] 紀行文集『インドから』に含まれる随想と多くの詩は旅行後に書かれており、その多くは雑誌や新聞などに発表された後、1913年に紀行文集として編集された。旅行中に書かれた詩はこの「アフリカの向かい側で」の他、「紅海の夜」*Abend auf dem Roten Meer*、「セイロン島着」*Ankunft in Ceylon*、「船室での夜」*Nachts in der Kabine*、「原生林の川」*Fluß im Urwald* の 4 篇のみである。

[13] Hesse, Hermann: *Gegenüber von Afrika*. In: ders.: *Aus Indien (um Texte aus dem Nachlaß erweitert von Volker Michels)*. Ulm 1980, S.9.

[14] Ball, Hugo: *Hermann Hesse*, Frankfurt a.M. 1977, S.105.

客船にはそれぞれの目的でアジアへ向かう多くのヨーロッパ人が乗っており、ヘッセは徐々に彼らと親交を結ぶ。船内で知り合ったのは、結婚するためにマニラへ向かうデルブリュック嬢と途中まで娘を送りがてら同行する彼女の家族、伝道師の一行、領事夫妻などである。船には婚約者の許へ向かうためアジアへ旅している女性が7人乗っていて、後に『花嫁』Die Braut という短編小説の素材として用いられている。9月11日の旅日記には、船上のドイツ人とは大抵知り合いになったこと、イギリス人と親交を結ぶのが思ったより困難であるということが記されている。船上では幼い息子たちからの手紙を受け取ったりもしている。

船の生活は「心地よく、心を落ち着かせる、心地よさと優雅さの気持ちのよい混和、少し軽佻で怠惰」[15]とある。ペストとコレラのため、コロンボまで上陸は許されないことになっていた。9月12日、「これまで濃いブルーだった海は、ライン川のような明るい緑色になり、それから粘土のような濁った色になった。これは増水しているナイル川の水である」[16]とある。目指すアジアはまだ彼方ではあるが、旅日記には風景や船上生活の描写が続き、心から旅を楽しんでいる様子が伺える。

2-2　随想「スエズ運河の夜」Nachts im Suezkanal

ジェノヴァを出発したヘッセらの船は、ナポリ、ポートサイドを経由して9月12日にスエズ運河に入る。旅日記にはスエズ運河はつぎのように簡潔に、しかし印象深く描写されている。「スエズ運河。殺風景で果てしなく細長い、左側は砂と泥ばかり。右側は低木を植えた堤防、その向こうは沼地、葦の茂み、シナイ山地の最初の山。すべてが非常にいきいきしている。大きな燃えるような日の入り」[17]、「神秘的な夜中の運河の航行、長いひっそりした停泊、月、星、あらゆる方向からぎらぎらしたサーチライトの光、完全な静寂」[18]。この日、ヘッセは夜中に甲板で上海出身の中国人と言葉を交わし、その様子を紀行文集第1番目の随想「スエズ運河の夜」に著している。

船は熱帯へと入る。暑さとまとわりつく蚊に悩まされ、ヘッセは眠ることができない。静寂の闇の中、起き出していくと、後方の甲板に中国人が一人立っていた。上海出身のこの小柄な中国人はヘッセに気づくと「いつものようにとても感じよく」[19]微笑んだ。

> 彼は詩経を全て暗記していた。彼は中国のあらゆる試験を済ませ、これからまだいくつかの英語の試験を受けるのである。彼は水に映る月の光について流暢な英語で穏やかに

---

[15] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise* In: SW.11, S.332.（ヘッセ全集からの引用は、Hermann Hesse: *Sämtliche Werke in 17 Bänen*. Frankfurt a.M. 2001-2003. に拠り、巻と頁数を SW.11, S.332. のように示す。）.
[16] Ebd.
[17] Ebd.
[18] Ebd., S.333.
[19] Hesse, Heramann: *Nachts im Suezkanal*. In: ders: *Aus Indien*, a.a.O., S.11.

感じよく語り、私に向かってドイツとスイスの美しい風景を褒め称えた。[20]

折しも1911年には辛亥革命が起こり、世界中がその話題で持ちきりであった。ヘッセも「この人はきっと我々が知っている以上のことを知っているのだろう。彼が今旅をしているのも偶然ではないのかもしれない」と推測している。けれどもこの中国人はあくまでも泰然としており、彼の完璧な態度は終始崩れることがない。

彼は陽の当たる山の頂のように静かで無邪気で、礼儀正しく物柔らかに快活で、不愉快な問いのすべてに対し、人々を困惑させ、そして私を魅了した太陽のような明朗さで光を投げ返していた。[21]

彼は感じよく楽しそうに微笑み、しっとりとした賢げな目で船の光の動きを追う。[22]

彼は簡潔に、感じよく、礼儀正しく語り、青白い電気の明かりの中でずっと仏陀のように微笑んでいる。[23]

旅日記にはこの日、「易経を暗記している上海出身の中国人との語らい」[24]とごく簡単に記されているだけである。ヘッセが出会ったのは確かに中国のエリートであったに違いないが、「陽の当たる山の頂のような」、「仏陀のような」といった形容はあまりにも大仰である。中国のヘッセ研究者シャーも、この箇所をアジアに対するヘッセの過大な憧れの現れとして挙げ、「ヘッセのこの描写は、人物に関する客観的な報告と同時に時おり『シッダールタ』の渡し守や『ガラス玉演技』の音楽名人のような作中人物を思い起こさせるような強烈な理想化を含んでいる」と述べている。[25]

この日、ヘッセは旅に出て初めて肌で異郷を感じた。旅日記には「ここまでくると初めてすべてが違っている、別大陸だ」[26]「何年も故郷を離れているような気がした。私に語りかけてくれるものはなく、親しいものも好ましいものもなく、私を慰めてくれるものもなかった」[27]とある。あらゆることが異なる異郷という舞台において、理想のアジア人の出現は旅への期待を高める役割を果たしている。

9月13日よりスエズ運河を通って紅海を渡る。この辺りからが徐々に南方の気候へと変化

---

[20] Ebd.
[21] Ebd.
[22] Ebd., S.12.
[23] Ebd.
[24] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: SW.11, S.333.
[25] Husia, Adrian: *Hermann Hesse und China*. Frankfurt am Main 1974, S.61.
[26] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: SW.11, S.333.
[27] Hesse, Hermann: *Nachts im Suezkanal*. In: ders: *Aus Indien*, a.a.O., S.12.

していく地域である。詩「紅海の夕べ」Abend auf dem Roten Meer はこの頃船の中で書かれたもののようだ。

猛暑が続いていた９月14日の旅日記には「すでに一週間船上にいる。紅海は噂どおりだ、本格的に暑くなるだろう」[28]とある。セイロン島に到着するまでの10日間、旅日記には毎日暑さについての記述がある。「暑い夜」、「朝から暑い」、「日中暑くなった」、「すさまじい暑さ」、「すごい蒸し暑さ」などの表現が連発されている。イルカやトビウオに歓喜し、夜には天の川を眺める。甲板では他の船客とゲームや仮面舞踏会で社交的に過ごしている様子も伺える。

２-３　詩「セイロン到着」Ankunft in Ceylon

９月23日、午前11時過ぎにセイロン島のコロンボに到着。同日夜８時には再び出港するが、コロンボでは一旦下船して充実した一日を過ごす。旅日記には「この新しい町はいきいきとしていてすてきだが、ひどくヨーロッパ化されている」[29]という落胆が記されている。すばらしい木々や庭、花や大きな蝶々、現地の生鮮市場、果汁たっぷりのマンゴーの実、水気を含んだ冷たいカリン、と目につくままに異国を感じさせるものを列挙し、「あらゆる方向から流れ込んでくる、色とりどりのぎらぎらまばゆいオリエント」[30]を楽しんでいる様子である。この日に作られたのがつぎの詩であった。

セイロン到着

海岸の高い椰子の木、
光る海と小舟に乗る裸の漕ぎ手、
太古の神聖なる土地、
若い太陽の永遠なる火が燃えている！
青い山地は霞と夢の中に消え、
頂上が燃え、太陽の光でほとんど見えない。

海岸はぎらぎら輝いて私を迎える。
珍しげな木々は屹然と空にそびえ立ち、
家々は灼熱の日光の中で色とりどりにゆらめき、
甲高い声の聞こえる路地の雑踏は私を呼んでいる。

---

[28] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: SW.11, S.333.
[29] Ebd., S.336.
[30] Ebd.

ありがたい気持ちで私は雑踏を見つける ―
延々と続く航海の後のなんとすてきな変化だろうか！
私の心は喜びで苦しくなり、
まるで恋をするときのように至福の旅の陶酔の中でときめいている。

単調な船の旅を一旦中断して賑々しい町に入り込み、その変化をきっかけにさらに高まる旅への期待が現れている詩である。いきいきとした町の雑踏は生命力の比喩であり、新しい世界への入り口としてヘッセを惹きつけている。見聞きするすべては未知の別な世界のものであり、自分の探しているものはきっとここで見つかるに違いないと待ち望む。目の前に広がる光景は「海岸」、「椰子の木」、「光る海」、「裸の漕ぎ手」といった語を用いて絵画的に描写されているが、これらはいわゆるヨーロッパ人が抱いているアジアのイメージそのものである。この光景がまるで一幅の絵のように描かれていることで、ヘッセの期待と先入観として抱いているアジアのイメージとがぴったり一致していることが伺える。期待感はここではヘッセが本来抱いていた心理的なものにではなく、既成の視覚的イメージでもって表されている。自覚してはいなかったかもしれないが、ヘッセは「いわゆるアジア的」なものの中に自分の求めるものが存在していることを想定していた。この旅ではその予想がつぎつぎに覆され、失望へとつながるのであるが、その体験を通じて初めて、旅の終わりに「アジアの核心」「ヘッセのアジア」なるものを予感することとなる。

3　現実

3 - 1　随想「アジアの夜」Abend in Asien

9月27日午後4時ころ、船はようやくマレー半島沿岸のペナン島に到着。いよいよ上陸である。ペナン島での滞在地は中心地区ペナン（現在のジョージタウン）、当時すでに「観光のエルドラド」の評判を持っていた町である。当時シンガポールで働いていたシュトゥルツェネガーの兄ローベルトがここで二人を出迎えた。ペナンではまずホテルに向かうより先に、熱帯用の白い麻のスーツを誂えに行く。当時東南アジアを旅するヨーロッパ人はそろってこのスーツを身につけていた。それから人力車で町の散策、これが紀行文集第2番目の随想「アジアの夜」に描かれている。

ペナンで泊まったホテルはこの旅行中最も快適で、船旅に疲れた身体をゆっくりと休めることができた。「アジア的な快適さ」に満ちたこのホテルには、各々の客室に玄関、寝室、洗面所、バスルームが付いており、テラスからは椰子の木と海が見え、蚊避け網のついた大きなベッドが備え付けてある。風通しのよい部屋におかれた寝椅子に横たわり、「哲学者の目をし、外交官の手をした小柄な中国人」[31]に飲み物を給仕してもらう。イギリス・インド

[31] Hesse, Hermann: *Abend in Asien*. In: ders: *Aus Indien*. a. a. O., S.22.

風の食事には少々失望するものの、見たことのない木々、カブトムシ、セミ、ハチなどに興味が尽きない。夕食後、人力車で町の散策、覚えたてのマレー語で車夫に話しかけてみるが通じない。車夫は「そういう場合どの車夫でもするように、子どものような気持ちのいい底なしのアジア人の微笑で私に心から微笑みかけた。」[32]人力車で町の中心まで行くと、あらゆる通り、広場、建物に人間が密集しており、感銘を受けている。

> 路地という路地、広場という広場、建物という建物に、驚くべき、枯れることのない、濃縮された、けれども騒々しくはない生が燃えていた。いたるところに東洋の隠れた支配者、中国人がいる。いたるところに中国人の店、中国人の見世物小屋、中国人の職人、中国人のホテルクラブ、中国人の茶屋や売春宿。その間にところどころマレー人とタリン人であふれている路地がある。黒い髪の上の白いターバン、ブロンズ色に輝く男たちの肩、金色のアクセサリーをぶらさげた静かな女たちの顔、松明の炎の揺らめき、笑ったり大声をあげて泣いたりしている、おなかの膨れた目のすばらしくきれいな褐色の子どもたち。[33]

アジアの民衆はまた疲れ知らずであった。日曜日ごとに安息日があり、週日も就業時間を決めて働くのが普通であるヨーロッパ人の基準から考えると、これもまた異国を感じるものであったに違いない。

> ここには日曜日もない。エンドレスに、目に見える休憩もなしに、落ち着いた安定した仕事が続けられる。こせこせしたところや大げさなところはどこにもなく、どこもかしこも勤勉で快活である。[34]

自国にいても特に丈夫な方ではないヘッセは、インドネシアでは気候が身体に合わず、旅日記にもほぼ毎日体調不良を記している。そのような状況で、ヘッセは自分にはないアジア人のエネルギーを肌で感じ、迫りくる熱気に当てられ、迫力に押しつぶされそうな雰囲気が伝わってくる。

3 - 2　随想「ペライアン」Pelaiang

迫りくる圧倒的なエネルギーは人間から発せられるだけでなく、自然についても同様である。10月 5 日から 6 日にかけて、スマトラからトンカル、ジャンビと奥地に入っていく。ジャンビではスイス人の材木商ルイス・ハーゼンフラッツに迎えられ、彼の家に一泊する。10月

---

[32] Ebd.
[33] Ebd., S.22f.
[34] Ebd., S.23.

７日、ヘッセ、シュトゥルツェネガー兄弟、ハーゼンフラッツ、中国人コックのゴモクの５人は原生林の探索に出発した。ジャンビという集落は川を伝ってしかたどりつけないような内陸部にある。人口１万２千人、周囲を森と小さい丘に囲まれた、広い美しい川のある村である。探索の目的地である集落ペライアンはここからさらに小舟に乗って奥に入り込んだところにある。百人あまりの人々は皆ハーゼンフラッツによる材木会社の雇い人である。一行はここに10月11日まで滞在し、屋根と壁が椰子の葉で葺いてある、2.5メートルもの高さの高床式の竹の小屋で寝泊まりした。10月11日の旅日記には「ペライアンは、この旅で非常に気に入って、長くとどまりたいと思った第一の場所だ」[35]と記されている。紀行文集第９番目の随想「ペライアン」はつぎのように始まっている。

> 他の人々と一緒に商売目的でマレー半島に来ているヨーロッパ人は、いつも、そしてたとえ思いがかなわないと知っていても、イメージと願望の背景としてファン・ツァンテン島のような光景と原始的な楽園の純真さとを心に描いている。生粋のロマン主義者ならこんな楽園を時には見つけることもあるだろうし、しばらくの間は大抵のマレー人の善良な子どもらしさに魅了され、自分をこのすばらしい原始状態の仲間だと信じることができるだろう。[36]

ヘッセは自分はそんなロマン主義者ではないと前置きをしたうえで、それでもパラダイスを発見したという。ようやく最近になって開拓された、「かなりの部分処女原生林である、まだほとんど知られていないジャンビ地区の奥地」[37]である。メンバーが各自好きなことをして過ごしている間、ヘッセは「お伽の国の絵本のような終わりのない森の世界を歩き回った。」[38]

ヒルやヘビから身を守るため、冬にドイツの森を歩くときのような重装備をし、原生林の中を散策する。お腹が白く、前足が赤っぽいきれいな黒リス、大きな鳥、サルの家族、巨大な蝶々、人間の足ほどの大きさをしたムカデ、灰色、茶色、赤、黒と多種多様であり、何もかも見飽きることがない。

旅日記に詳しく記されているのも原生林の自然の様子である。「原生林の中ではいたるところで絶え間なく大きな虫、非常に多くの鳥のたてる音が重なり合う。お腹が白くて前脚が赤い黒いリスが一匹、小さい茶色のリスはたくさんいる。原生林の中で一人きりだった最初の数時間、信じられないほど大きい蝶々を見た。夕方頃にはサルの一群、上の方から音を立てて枝を渡りながら力強く跳んでいく」[39]（10月８日）。ペライアンでヘッセに強い印象を与

---

[35] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: SW.11, S.351.
[36] Hesse, Hermann: *Pelaiang*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.34.
[37] Ebd.
[38] Ebd., S.36.
[39] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: SW.11, S.349.

えたのはこのような四方から迫りくる豊饒な自然であった。随想の方にはつぎの表現にこの感嘆を読み取ることができる。

> ここには自然が休みなく、驚くべき繁殖力の中で、私を痺れさせ、ほとんど驚愕させたような巨大な生のエネルギー、惜しげのないエネルギーの中でぶくぶく発酵している。[40]

ペライアンにはアイアンウッドの伐採場ができていて、商売用に樹木が切り倒されていた。同行のハーゼンフラッツはその伐採会社の社長である。ヘッセは伐採場にも足を運び、巨大で重量のあるアイアンウッドを人間が苦心しながら切り倒していく様子を見学しているが、結局のところ人間にはこの原生林を支配することなどできないと結んでいる。

> 資源をむしり取ろうとしているわずかばかりのちっぽけな敵にはびくともせず、原生林は今もなお存在している。川岸ではワニが日向ぼっこをしている。蒸すような熱気の中、尽きることなく繁殖は続く。米を作るために原住民が開墾しても、そこは2年もすると背の高い藪になり、6年もすると森になるのだ。[41]

ペライアンでヘッセの心に響いたのは原生林の美しさのみならず、その偉大さ、蒸し返すような大きなエネルギー、再生力であり、それと較べた人間の無力さをヘッセはここで実感している。

3-3　随想「森の夜」Waldnacht

紀行文集中第12番目の随想「森の夜」も同じくペライアンでの体験を表したものである。ここでも濃厚な自然の中に我が身を置き、ヨーロッパにいては感じることのなかった原初の力を実感している。

川で水浴びをした後も、後から後から汗が流れ落ちるほどの暑さ。ヘッセとシュトゥルツェネガー兄弟の3人はすでに何日も同じメンバーで行動しているため、もう語り合うこともない。まだ9時半にもならないうちに互いにおやすみの挨拶を交わし、ヘッセは疲れた身体を蚊避け網の中のマットレスに沈めた。あたりは目をつぶる必要もないほどの漆黒の暗闇である。目を凝らすと開いた窓の四角い形がなんとか見分けられる。窓の外は小屋の中の壁や天井よりかろうじてほんの少し明るいというくらいであるが、圧倒的な自然の力が有無を言わせぬ力で伝わってきた。

> けれども外の野生の自然がその決して途切れることのない繁茂した営みの中で発酵し、

---

[40] Hesse, Hermann: *Pelaiang*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.37.
[41] Ebd.

煮えたぎっているのが感じられる。百もの動物の物音を聞き、豊かな成長の匂いを吸い込む。生はここでは価値をあまり持っていない。自然は大事をとるようなことはせず、節約する必要がない。けれども我々白色人種は必死だ。白人は竹小屋を持ち、永遠なる原生林を切り開くために白人を手伝う百人ほどのマレー人と共に村を作り、近年には有史以来初めて斧と作業の音が茂みの中に響き渡るようになった。[42]

数年前にこの土地に住んでいた現地人たちは調査のときに打ち殺され、夜になると殺された者たちの魂が川の上に漂う。仲間の現地人たちはそれを怖がったが[43]、白人たちは気にも留めずに森の中を歩き回り、太古の木々を切り倒した。造船のためである。

こんなことを考えているうちに、ヘッセはまどろみ始め、夢と現の間をさまよい出す。ヘッセは小さな子どもになって泣いていた。一人の母親が歌を歌いながら自分を揺すってくれている。歌はマレー語だった。重い目を開けてその人を見てみようとすると、自分の方に顔を寄せささやいているのは齢千年の原生林だった。そうだ、自分がいるここは自然の心臓部なのだ。ここでは世界は一万年前とまったく変わらない。エスキモーでさえ機械に頼って軟弱化するこの時代でも、原生林に対しては人間はまだしばらくの間は手を出せない。原生林では人間はマラリアに食い尽くされ、釘や銃は錆だらけになり使いものにならない。人間は自然の中で朽ち果てて消滅する。そしてその死体の山から、たちまちのうちに強くたくましく新しく新しい混血民族が生まれてくる。

ふいに何かにひどく揺り起こされた。飛び起きて蚊避け網を引き開ける。「荒々しい、白い、おそろしくぎらぎらした光が私の目を眩ますように叩きつけた。少し経ってからようやく私はこの光が間断なく続く稲妻だったのだと気づいた。雷鳴は轟とともに続き、空気は奇妙に揺れ動き、指の先がぴくぴくするのを感じるほど電気を含んでいた。」[44]窓は稲妻の光の中で揺れ、窓枠はすごい勢いで過ぎ去っていく鉄道列車の窓のように歪んだ。

とその時、二歩離れた目の前では、森が私を見つめていた。形のある様々なものがかきまわされた海、絡まりあった大枝と大量の木の葉と羊歯のかきまわされた海のような森が、大きくうねり、絶望的に抵抗し、稲光にかすめられ、突如として痙攣するくらい心臓まで傷つけられ、きしみ、怒りながら。私は窓辺に立ち、目を眩まされ、朦朧として、この暴風を凝視した。そして極度に冴えた感覚で地上の怒り狂った生が溢れ、浪費されるのを感じた。私はこのような荒れ狂いに順応していない私のヨーロッパ的な脳と感性をもってそれらの間に立っていた。そして好奇心に満ちて見つめながら、私の人生の多

---

[42] Hesse, Hermann: *Waldnacht*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O. , S.41.

[43] 原住民が死者の霊を怖れているということは「夜甲板で」Nacht auf Deck にもある。夜中に船に燃料を積み込むときには死者の霊をなだめるために歌を歌うという。Hesse, Herman: *Nacht auf Deck*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.47.

[44] Hesse, Hermann: *Waldnacht*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.41f.

くの夜と昼を、あのじつに多くの時のことを思い浮かべていた。今ここにこうしているのと同じように、かつて地上のどこかに立って、見つめたいという奇妙な衝動に導かれ唆されて、未知のことや未知の現象に眺め入っていたあの数知れぬ時のことである。[45]

これまで体験したことのない自然の猛威を前に、ヘッセはすっかり魅入られてしまい、目が離せない。何がこんなにもヘッセの心を捉えているのか。ヨーロッパ人のヘッセはこのような自然の力を見たことがなかった。「暴風」das Unwesen、「荒れ狂い」das Toben といった語で表現しようとしている自然の力はヘッセが慣れ親しんでいたヨーロッパ的観念をはるかに超えるものであった。しかし、ここで注目すべきことはこの自然の猛威を見つめながら同時にヘッセが自分の人生の幾つもの場面でこれと同じ種類の体験をしたのを思い出すという事実、未知の事柄や現象に眺め入っている自分を思い出すという事実である。ヘッセは同時に、自分の内部、つまり心の深部を見つめていたのである。そして遠いアジアまでやってきた旅の意義はまさにこの点にあることを直観した。

私には自分がこの南スマトラの沼地の原生林に立ち、熱帯の夜の嵐を見ていることが一瞬たりとも無駄には思えなかった。私はまた一瞬たりとも危険を感じたりはしなかった。むしろ未来を予感していた。そして事実、これから先何度と知れず、ここから遠く離れた場所で、ひとり孤独に、好奇心に満ちて立ち、驚きの念をもって、把握できないものを見つめ、この把握できないものに、私自身の内部に潜む把握できないものや理性的でないものが応答し、兄妹のように結びつくという経験に遭遇することになった。[46]

ヘッセはこの旅行中、自分があくまでもヨーロッパ人であることをとりわけ強く感じていた。ヘッセはヨーロッパの知識人が東方に目を向けるという時流に乗って遠いアジアまでやって来て、一面では当時のヨーロッパ人の目でアジアを眺めていたが、決してそれだけではなかった。最初の詩「アフリカの向かい側で」に見られるように、ヘッセがアジアに惹かれたのは、それが何であるのか分からない何かを探し求めるためであった。そして求めているものの核心の片鱗を今ここで見出したのである。熱帯の嵐の夜にヘッセが見たものは、「把握できないもの」das Unbegreifliche、理解のできないものであった。それに魅入られ、引き入れられるのは、自分自身、内部の同じ把握できないものを持ち、それが自然の猛威に呼応し、共鳴したからである。ヘッセは原初の自然の中に自らの魂の根源を見ているのである。

この体験は未来の先取りでもあるが、しかしまたこれを契機に、子ども時代の同じような経験が呼び覚まされる。幼い頃、動物が死んだりサナギがチョウになったりするのを驚いて見つめたときの感情が蘇る。嵐の森で感じたのと同じ気持ちで、かつて幼いヘッセは死んで

[45] Ebd., S.42f.
[46] Ebd.

いく動物の眼や花の萼に見入ったのであった。

> これらの事象を説明したいと願ったわけではない。その場に居合わせたい、そして偉大な声が私に語りかけ、私と私の生と感覚がゆっくりと消え、どうでもいいものになってしまうこの稀有な瞬間を少しでも逃したくないという欲求があるだけだった。私と私の生、私の感覚などというものは雷の深い轟き、いや、把握しがたい出来事というもっと深い沈黙に較べると、ただの薄っぺらな表層と化してしまったのである。[47]

ペライアンでの体験をもとにした作品はこの二つの随想のほか、詩が２編ある。詩「ペライアン」は随想に出てきた熱帯の嵐を描いたもの、詩「原生林の川」は太古から流れる川の岸辺での体験を歌ったものである。ペライアンでの体験がいかに心に残るものであったかを示していよう。

さて、ペライアンでの印象的な熱帯原生林体験の後、一行はさらに数日間ジャンビ地区に滞在する。ハーゼンフラッツ氏のアイアンウッド工場を見学したり、蝶々の採集に出かけたり、ボートで川下りを楽しんだりしていたが、依然として体調はよくならず、10月12日には旅程を縮めて帰国する決断をしている。旅日記には簡単に「引き返しの決断」とあるが、これは当初予定していたインド本土への上陸をあきらめたということであり、このまますぐに帰国の途についたわけではない。旅は続き、原初の自然への驚嘆を重ねていくこととなる。

３-４　随想「水のメルヘン」Wassermärchen

10月14日、汽船「デ・コック」にてジャンビ地区を出発、10月16日にパレンバンに到着、10月23日までの約一週間を過ごす。パレンバンはスマトラ島南部の町である。人口７万５千人、大きな川のほとりの湿地帯に位置し、杭上家屋が立ち並ぶ。ヨーロッパの旅行者はここを「マレーのベニス」と呼んでいるが、これはこの町が単に水辺にあって日常生活に舟が使われているというだけのことであった。10月17日、午前中はパレンバンのバザールで買い物などをして過ごした後、ヘッセ、シュトゥルツェネガー、ハーゼンフラッツの３人は案内人と共に半日小舟で上流へと探索に出かける。14番目の随想「水のメルヘン」に描かれているのがこの時の出来事である。

「昨日パレンバンから小さい細長い小舟に乗って出かけた道を、もう一度愛する女性と一緒に行きたいものだ」[48]というちょっとおどけた書き出しでこの随想は始まる。小舟に乗ってパレンバンを出発すると、杭上家屋の間に垣間見えるのは「いつもながらの無邪気で感動させられる生」[49]である。舟を進めるにつれ、人々の生活が見えてくる。網漁、裸で騒いで

---

[47] Ebd.
[48] Ebd., S.59.
[49] Ebd.

いる子どもたち、炭酸水やシロップ、コーランやイスラム教の祈祷書を売る商人たち、水浴びをする男の子。

小舟はゆっくりと前進し、小川はどんどん狭く浅くなる。人家がなくなり、緑色の沼地と藪が静まり返って一行を取り巻く。岸辺にも水の中にもあちらこちらに木々が立っている。木々の数はいつの間にか増え、数えきれないほどの気根をヘッセたちの方へと伸ばしている。頭上は枝葉の緑でぎっしり埋められていた。ほどなく一本一本の木は見分けられなくなる。この静まり返った密林の中に時折カワセミやシギ、またカササギのような白と黒のツグミに似た太った鳥が飛び交っている。その他は「鬱蒼とした木の丸天井の内部からの成長、呼吸、絡み合い以外には何の物音もなく動物もいない。」[50]一行はさらに「絡み合った木の葉で覆われ、水生植物の大きな葉で取り囲まれた、もつれ合った緑の無限」[51]の間を進みゆく。自然の豊穣に圧倒され、声も出ない様子である。

> 各々黙ったまま驚嘆して座っていた。この魔法が再び破られることがあるのか、いつ破られるのか、どんな風に破られるのか、誰も考えもしなかった。この魔法が半時間続いたのか、１時間だったのか、それとも２時間だったのか、今ではもうわからない。[52]

沈黙を破ったのは森に住むサルたちだった。大きな灰色のサルの家族が侵入者に腹を立て、喚き立てながら木から木へと飛び移る。一行は小舟を止めてその場にとどまった。サルたちは飛び回り、第二の家族、第三の家族とその数を増していく。最後には尻尾の長い大きな灰色のサルで頭上はいっぱいになった。どのサルも腹を立て、疑り深げにこちらを伺い、番犬のように唸っている。百匹以上のサルが集まり、シューシューと怒りの息遣いが聞こえてくると、小舟の案内人は声を出さずに指で警告の合図をした。一行は注意深く静かに振る舞い、木の枝一本触らないよう注意した。

白人支配の植民地アジアで主人然として振舞うヨーロッパ人も大自然の中では無力である。パレンバンから半日の水上遠足はヘッセにとって、自然の偉大さと人間たるもののちっぽけさを同時に味わう体験であった。

4　失望

4-1　随想「インドの蝶」Indische Schmetterlinge

この後ヘッセとシュトゥルツェネガー兄弟の三人は、シンガポールからペナン経由でコロンボへと、往路とは逆のルートで船の旅を続ける。体調に関する不満を毎日のように書き連ねているのと同時に、行く先々で蝶々の採集をしたり、知人の家に招かれたり、旅日記から

---

[50] Ebd.
[51] Ebd.
[52] Ebd.

は充実した毎日を過ごしていた様子が伺える。

11月12日、コロンボから列車で５時間のところにあるキャンディへと向かう。イギリスに敗れて滅亡したセイロン島最後のシンハラ王国キャンディは仏教寺を見どころにした観光地で、ヘッセもご多分にもれず寺院へ足を運んでいるが、この町で味わったのは失望と腹立たしさばかりであった。[53]

キャンディでヘッセを何より悩ませたのは物乞いをする原住民たちである。古代の王の町、僧侶の町であるキャンディはセイロン島で一番きれいな町だと聞いていたのに、「裕福なイギリス人に組織的に堕落させられた観光小都市のあらゆる悪徳と欠点を有している。」[54]みすぼらしくて不潔なホテル、人造湖のほとりの安っぽい騎士の像、観光地ずれした絵葉書、キャンディはイギリスの財源によって中途半端にヨーロッパ化された町である。最もおぞましいのは「観光客産業のハイエナ」である現地のアジア人で、旅日記にはつぎのように記されている。「ここでの散歩は苦行である。３メートルごとに物乞いや人力車の車夫がやって来るし、親たちはにやにや笑いながら大勢の子どもを物乞いによこす。片時も気の休まる間がない。」[55]

とはいえ、人間というのはどんな状況にも慣れるものである。ヘッセは暑さや蚊、アジアの食事、更には腹痛と下痢にまで否応なく慣れたと書いているが、また植民地の人間に対し自分が高飛車な態度で接することをも学びとったという。ここでは小さい子どもから老人、僧侶に至るまで旅行者の周りに群がり集まり、小銭を要求する。アジアの人間に抱いていた漠然とした畏敬の念と憧れはここで完全に消え去り、代わりに哀れみと怒りとがこみあげてくる。ヘッセは物乞いをする少女の前を素通りし、聖者のような風貌の白いひげを生やした老人を無視することを学んだ。彼らが欲しているのはお金のみだからである。「大抵のインド人の心のこもった求めるような祈りの眼差しは、神や救いを求める呼び声などでは全くなく、ひたすら金銭のみを求める叫びにすぎないという忌まわしい事実を私は受け入れた。」[56]

11月14日の日記に「ラテン語の学名を全部知っている抜け目のない蝶の売買人がまたもや私を見つけた。彼から８ルピー分買い取った。（……）今日品物を買ってやった蝶男にひっきりなしに付きまとわれている」[57]とあるが、随想「インドの蝶」にはこの時の蝶の売買人、ビクター・ヒューズというセイロン人のことが描かれている。

厚かましい現地人たちに慣れると、ヘッセは果敢にも虫取り網を持ってホテルを出るようになった。大勢の生意気な少年たちがぞろぞろついてきて、蝶のいる場所を教えようとしたり、ハエを追い払ったりしては「１ペニーを求めて手を伸ばす。」[58]ひるむことなく子どもた

---

[53] この地での体験は、紀行文集第18番目の随想「キャンディの日記から」*Tagebuchblatt aus Kandy*、19番目の随想「キャンディ散策」*Spaziergang in Kandy*、それに1912年２月４日「新ウィーン新聞」に掲載された『インドの蝶』*Indische Schmetterlinge* の３篇に著されている。

[54] Hesse, Hermann: *Indische Schmetterlinge*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.101.

[55] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.183.

[56] Hesse, Hermann: *Indische Schmetterlinge*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.92.

[57] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.182f.

ちを振り切って小道に逃げ込むと、感じのいい、物静かな紳士がやって来るのに気づいた。ビクター・ヒューズという名のこの男は流暢な英語で、この道は石切り場に続いていて蝶の採集には適していないこと、別の道の方がいいことなどを教えてくれた。彼はまた蝶に関して専門的な知識を持っていて、ヘッセが聞いたこともないようなラテン語の学名を次々に言ってみせる。図々しい物乞いたちとは一味違うこの男にヘッセはたちまち好意を感じた。

> このすばらしい人の賢そうな悲し気な目の奥から、古い、高貴な、虐げられた民族性が、静かな非難をこめて私を見つめた。彼の言葉や身振りからは、洗練された礼儀正しさと、優しい仏教徒らしい柔和さという古い文化が伺われた。[59]

こうしてヘッセがこのすばらしいアジア人とインドの蝶について語り合っている時、彼は服の内側からいきなりきれいな箱を取り出した。「私の顔にすぐに現れた疑念を裏書きするかのように、彼の気品ある顔にはおもねるような物売りの微笑みが現れた。」[60]彼が取り出したのは蝶とカブトムシの標本だった。これを15ルピーで買わないかと言う。ヘッセは即座に断るが、これ以降キャンディを離れるまで彼はヘッセに付きまとう。ホテルに押しかけ、通りで待ち伏せし、町中のありとあらゆる場所に出現してはヘッセに迫る。数日もするとヘッセは丁寧な言葉などかけないようになり、10ルピーで商品を買い取ってからは「彼を無視し、怒鳴りつけ、不愛想な身振りで追い払う権限を手に入れた。」[61]ヘッセは通りで彼の姿を見つけると逃げ出し、身近に彼の気配を感じると自然と身が強張るようにさえなった。

白人相手の観光都市でアジア人が見せるこのような厚かましさ、しつこさにヘッセは辟易しているが、他方でヨーロッパ人が「主人であり、マスターであり、旦那である」[62]ことをアジア人に対して誇示する傲慢な態度に不快感を抱いている。10月17日の旅日記に記されているのは、材木商ハーゼンフラッツのことである。ホテルでの朝食時、ハーゼンフラッツが中国人のボーイにきれいなナイフを要求すると、代わりのナイフはない、「ご主人方」はチーズの横についているナイフを使えばいいではないかと返事があった。このことでボーイはひどく叱責されるが、ハーゼンフラッツは加えてシンガポール辺りから来ている原住民はイギリス人に甘やかされていて、オランダ保護下の原住民が規律を保っているのに較べると生意気すぎるといったコメントを付け加えたのだ。当地で何年も現地人を雇って商売をしているハーゼンフラッツは典型的な支配階級の白人である。ヘッセは、自分に対しては親切な彼がアジア人の前に出ると人が変わったようになるのがやりきれない。旅日記にはつぎのように記されている。「親切で誠実なヨーロッパ人でさえ現地人を被支配者、ずっと下等な存在と

---

[58] Hesse, Hermann: *Indische Schmetterlinge*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.92.
[59] Ebd., S.94.
[60] Ebd.
[61] Ebd., S.95f.
[62] Ebd., S.93.

みなしているというこの土地での常識はいつも繰り返し私を驚かし、傷つけるのだ。」[63]

4 - 2 「キャンディの日記」Tagebuchblatt aus Kandy

11月17日、雨の中を夕方６時ころにヘッセは仏教寺を訪れた。辺りはすでに暗い。絶食と下痢のせいでふらつきながらよく考えもせず近くの仏教寺に向かい、ほどなく寺の入り口に到着、門をくぐると暗い部屋の中にたくさんの細い蝋燭が鬼火のように燈っている。すぐに一人の案内人がヘッセを独り占めにし、先へ押しやった。両手に蝋燭を手にした白い衣服の少年が二人、急いでやって来た。少年たちは前を行き、熱心な様子でどんな低い階段も見逃さず、かがんで照らし、ヘッセが転ばないように気をつけてくれる。ヘッセはお伽の国の洞窟、宝物の洞窟に向かっているような冒険の気分に浸る。

真鍮の皿がヘッセの前に置かれ、寺への入場料を入れるよう示される。ヘッセは１ルピーを入れ、蝋燭の少年に従って先へ進んだ。甘い香りの白い花が差し出されたのでいくらか受け取り、花売りにお金を渡す。花は様々な像の前に備えられる。目の前には無数の金色の蝋燭が揺らめく暗闇が広がる。ヘッセは小さな石造りのライオンや蓮の葉の絵、彫刻や彩色された柱の前を通り過ぎ、薄暗い階段を上り、大きなガラス製の厨子の前に立った。ガラス板も支柱もひどく汚れているこの厨子の中には、仏像がたくさん納められていた。金の仏、真鍮の仏、シャムの仏、セイロンの仏とありとあらゆる仏像が揃っている。

ここにはいたるところに僧侶、見習い、下働きがいて、訪問者の方に手を伸ばし、真鍮や銀でできた祭祀用の皿を前に置く。ヘッセは30人以上の人々に小銭を与えた。

> 私はみじめな僧侶には微塵も敬意を感じなかったし、仏像や厨子、馬鹿げた金や象牙、白檀や銀を軽蔑した。けれども私は気のいい優しいインドの人々に深く同情的な共感を覚える。何百年もかかってすばらしい純粋な教えを茶番にし、その代わりに救いようのない信仰、馬鹿げてはいるが心からの祈りと供物、感動的な人間の愚かさと子どもっぽさという巨大な建造物を建てたインドの人々に。自分たちの単純性の中で理解することのできた仏教の教えの弱々しい残り滓を、彼らは崇拝し、守り、神聖化し、飾り立てた。インド人はそれらに供物をささげ、贅沢な像をしつらえたのだ。――これに対し、我々は、仏陀の認識の源泉のずっと近くにいる西洋からの賢明で精神的な人間は、一体何をすることができようか。[64]

ヘッセはさらに仏像や柱の横に案内される。あちらにもこちらにも金やルビーや銀が輝いている。すばらしい宝物と並行して、僧侶や見習いのみすぼらしさ、掘っ立て小屋のような寺、ガラスの厨子のお粗末さ、照明の貧弱さは奇妙な感じがするほどだ。僧侶はサンスクリッ

---

[63] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.354.
[64] Hesse, Hermann: *Tagebuchblatt aus Kandy*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.99.

トやパーリ語の豪華な聖典を見せてくれたが、きっと自分では読めなどしないに違いない。小銭の献金と引き換えに彼らが差し出したものは立派な聖句などではなく、日付と場所を記したものだった。「そっけない、みすぼらしい領収証」[65]とヘッセは皮肉っている。最後に「仏陀の歯」なるものを見せられ、ヘッセは再び献金の小銭を置く。すべて観光用に設えられていた。「セイロンの仏教は写真を撮ったりそれについて雑文を書いたりするには結構だ。」[66]しかし、観光産業によって堕落した仏教にそれ以上のものはなかった。

仏教寺を後にして雨の降る暗闇の中を案内人について行くと、ふいに第二の小さい寺が現れた。ヘッセは中に入り、花を供え、内部の扉の方へと押し出される。すると目前の壁際にふいに18フィート（5.5メートル）もの大きさの涅槃像が見えた。御影石の仏像で、派手な赤と黄で彩色してある。

見学はこれで終わりだった。ヘッセは再び雨の中に立った。案内人と蝋燭持ちの少年と2番目の寺の僧侶に小銭を与えるべきだったが、すでに持ち金は全部渡してしまっていた。ここまでたったの20分しか経っていない。ヘッセが急いでホテルに戻ると、雨の中を「寺からの私の信者の小さい群れ」[67]が列をなしてついてくる。ヘッセはホテルの両替所で金を受け取るとそれを分け与えた。僧侶も案内人も蝋燭持ちも皆小銭の前にひれ伏した。

随想は「私は寒気を感じながら部屋へと上がった」[68]という一文で締めくくられているが、これはもちろん雨に濡れたためだけではない。ヨーロッパ世界で名の知れた仏教の町キャンディで目にした現実世界、観光地化された僧侶と寺院やそれに伴う堕落がヘッセの心を震撼とさせたのである。

5　憧れの正体

5-1　随想「キャンディ散策」Spaziergang in Kandy

翌11月18日の体験が描かれているのが「キャンディ散策」である。雨のそぼ降る中、ヘッセはキャンディの町をぶらついた。人々の住む小屋の敷居の前ではかわいらしい褐色の子どもたちが遊びまわっていた。小さい子どもたちはすっかり裸であるが、胸には魔除けのお守りを下げ、手首足首には銀の飾りを着けている。ここの子どもたちは外国人に対して物怖じしない。それどころか喜んで媚び、最初の英語の言葉としてばかりか最初のセイロン語としても金銭を乞う言葉を覚えるのだという。

絡み合った植物でふさがれつつある急勾配の横道を登っていく。温室のように植物が濃く匂う緑の小道を進んでいくと、無数の小さい棚田が現れた。泥の中では裸の労働者と灰色の水牛が地面を掘り起こしている。ここでは農民たちは収穫をすると同時に植えつけもする。

---

[65] Ebd.
[66] Ebd.
[67] Ebd., S.100.
[68] Ebd.

気候と土壌が良いため、一年中休みのない収穫が可能なのである。

散策の目的地はセイロン島最古の岩寺、ここはまたセイロン島で一番神聖な寺でもある。最初に僧院と僧侶たちの菜園が山肌にはりついているのが見えてくる。それから寺院が現れる。近年作られたアーチ付きの入り口はみすぼらしく、朽ち果てた様子である。見習いの少年が出て来てヘッセのために僧侶を一人呼んでくる。聖域の第一の扉が開かれた。僧侶が手にしている燃え残りの蝋燭２本が不安げにゆらめく。暗く静まり返った部屋。壁に描かれた古い絵が照らし出されている。ヘッセは壁をもっとよく見るために蝋燭の燃え残りで壁に沿って床まですっかり照らした。仏陀の伝説を書いたものだった。旅日記には「壁と天井はすべて古い彩色、仏陀の伝説の描写、一部は大層美しい」[69]とある。

つぎに僧侶は奥の扉を開けた。中は完全な暗闇である。何か不気味なものの予感がする。近づいてみると、蝋燭が作り出す光の環よりも大きい巨大なものが光と影の中から揺らめいて現れた。次第にこれが巨大な涅槃像の頭であることが分かると背筋がぞっとした。白く巨大に光る仏陀の顔。持っている蝋燭の光では全体を照らすことができない。薄暗がりの中、行きつ戻りつしてなんとか仏像全体のかたちが把握できた。ヘッセが見たのは42フィート（12.8メートル）の涅槃像だった。仏陀の身体は洞窟をいっぱいにし、左肩を岩の上にのせていた。仏像が立ちあがったら山が崩れそうな大きさである。

前日の観光地ずれした寺におけるのとは違い、セイロン最古のこの寺の壁画にヘッセは素直に感激している。しかし洞窟の奥に秘密めいておかれているこの巨大な仏陀の姿を目にしたときヘッセが感じたのは、人間の愚かさに対する直感であった。ヘッセが長い間書物で親しみ、畏敬の念を抱いていたアジアの宗教が、アジアの人間の手によってこんなにも本質から離れたものになってしまっている。そのことを本能的に感じた瞬間、数年前の自身の体験が脳裏に蘇った。ヘッセはアルザス地方のある村の小さいゴシック様式の教会に入った。弱い陽の光が埃をかぶったステンドグラスから斜めに差し込んでいた。ふと目を上げると、頭上には傷跡も生々しく額から血を流している巨大なイエス像がかかっていたのである。このときもヘッセはひどく驚愕してイエス像を見つめた。ヘッセはこの二つの体験を互いによく似たものとして思い出したのだ。

ヘッセはアジア旅行を通じて金銭に毒され本来の姿を失いつつあるアジア人に失望しているが、それでも「仏陀の残り滓」にしがみついている善良な民衆に哀れみと親しみとを感じていた。ところがセイロン島最古の神聖な岩寺で巨大な仏陀の像を見た瞬間、これはアジア人だけではなく、自分たちヨーロッパ人の内部にもある弱さであることに気付いたのだ。宗教の本質から離れ去ってはいるが、それでも心のよりどころとしての宗教から離れることのできない愚かな人間の弱さ、その両方をアジアとヨーロッパの人間が共に有していることに対する驚きをこの体験描写から読み取ることができる。植民という形でヨーロッパの文化が

---

[69] Hesse, Hermann: *Notizen von der Indonesienreise*. In: SW.11., S.379.

侵入し、独自のものを消失すると同時に堕落していくアジア、そして植民地の主人然として傲慢な態度を取り続けるヨーロッパ人、そのどちらにも人間としての弱さ、悲しさを感じている。ヘッセはそれを巨大な仏陀と巨大なイエス像の中に見て取ったのではあるまいか。随想はつぎのように締めくくられている。

> 我々は遠くまで来てしまった。人類のちっぽけな一部分である我々がこの二つ、つまり血まみれのキリスト像もつるつるした微笑む仏陀像ももはや必要としないとしたらすばらしい。我々はキリストと仏陀、それに他の神々をも乗り越え、それらなしで済ますことを学ぼうと欲する。けれども神を持たずに育つ我々の子孫が、いつの日にか再び勇気と喜びと魂の躍動とを見出し、己の魂の内部にある澄み渡った、偉大な、はっきりした記念像とシンボルに達するとしたら、それはすばらしい。[70]

ヘッセがここで暗示しているのは、西と東とを問わず存在する、人間の内部に潜むある力である。それは宗教の持つエネルギーにも似たもので、キリスト教であれ仏教であれ、原初の頃は確かに有していたものであろう。長い年月の間、人間はそれを心の拠り所として暮らしてきたが、いつのまにか方向を誤り、今では見当違いの偶像を作ってあがめるようになってしまった。キリスト像も仏陀像も心の拠り所のシンボルである。けれども必ずしもキリストである必要も仏陀である必要もない。キリストや仏陀に本来備わっていたものからこんなに遠く離れてしまった現在、人間はそれらを乗り越えなければならない。そして宗教という形ではなく、宗教が本来持っていた何かを自分自身の中に見出すようになるのではないか。肌の色、目の色の違いだけでなく、どうしても乗り越えられないような習慣や習性の差を身をもって十二分に体験しながら、それでもヘッセは人間の内部の、人間としての共通性を実感したのである。アジアへの憧れはキリストと仏陀への憧れにも似たものだった。探している何かはアジアの中になるのではなく、自分自身の内部にあるのである。

---

[70] Hesse, Hermann: *Spaziergang in Kandy*. In: ders: *Aus Indien*. a.a.O., S.104.